

# ほっ。とエピソード vol.4

## ～ある職場の、本当の話～

今回は、福島県いわき市で焼き鳥店を経営するA社さんのお話です。前編・後編の二本立てなので、次号もお楽しみに！

### ～前編～

高校の頃から飲食店経営という夢を持っていたA社社長、自分の店を持つため、少しずつ資金を貯めていました。二十三歳の時、運命的な出会いを果たすことになったのが、あるフレンチアイスの焼き鳥店。その焼き鳥に惚れ込んだ社長は、どうしても焼き鳥屋をやりたい、と願うようになりました。そしてお店に通い続け、店主と仲良くなると社長は、自分も焼き鳥店をやりたい、と店主に相談を持ちかけました。しかし、返ってきた答えは…「ぜったい無理」。いわきのような田舎じゃ、実績がない。それだけを言われてしまったのでした。諦めることができなかった社長は、店主に熱意を伝え続けました。そんな社長に心を動かされ、店主は徐々に応援してくれるようになりました。ひそかに友人知人に聞き込みをし、社長がどんな人物なのか確かめ、その上で人柄を信頼し、新店舗のオープンを全力で支援してくれたのです。こうして店主からお墨付きをもらった社長は、

二十五歳の時、いわき市内に念願のフレンチアイス店を構えました。

心からやりたかった、自分のお店を持つことができ、自分に厳しく、スタッフにも厳しく一生懸命に働きました。こだわりの焼き鳥はたちまち評判を呼びました。しかし、開店三年目に売り上げが傾いてしまいました。全力で頑張ってきたのにどうして。そんな思いからますます厳しく仕事を頑張らざるを得ませんでした。しかし、気がつけば店の雰囲気は悪く、スタッフ同士の仲もギクシャク。すっかり悪いスパイラルにはまっていたのです。このままではいけないと、社長はお店に新しい風を入れることを決意しました。

開店五年目には二号店を出す！という目標を持っていたため、これを機に、自分の店を持ちたいという人を育ててみることにしたのです。それまで一緒に仕事をしてきた仲間はアルバイトスタッフでしたが、このとき初めて「弟子」を持ったことになりました。もちろん、急には上手いきません。仕事の厳しさに負け、何人かのスタッフがやめてしまつたなど、つらい出来事も続きました。しかし、人を育てていくうちに、社長は気づかれたそうです。仕事を覚えてもらうには叱るよりもやってみせてあげ

るほうが良い。それから、ちゃんとできたらたくさん誉めること。

社長が少し意識を変えたことで、店の雰囲気は和やかになっていきました。スタッフも楽しそうに、それまで以上に仕事に打ち込むようになっていきました。厳しさも時には必要だけれど、それはスタッフに対する愛情があつてこそ、だつたのです。指示の仕方も分かつてきました。こと細かに指定するだけではだめ。丸ごと任せっきりにしてフォローしないというのもため。相手の仕事の習熟度によって伝え方を変えてあげる。初めはできなくても、信じて任せてみる。すると、現場の回転がぐっとよくなり、さらにいつも感謝の心、前向きな心で仕事をすることを心がけました。そうするうちに、気づけば店内にはあたたかい光が戻り、五年目にはお弟子さんが独立。二号店が開始しました。

その店舗が、曲折を経て軌道に乗つたころ、社長にフレンチアイスの本部から声がかかりました。「研修店舗をやってみないか？」お金のためだけでなく、お客様の笑顔のために…そんな志をもつて働く人材を育てたいという考えを持って社長は、これを引き受けました。そして今では、育つた若者は関東・東北を中心とする東日本地域

に、六十人を超えるまでになり、現在、社長が出された最初の店舗は、十五年を迎えられました。

現在、社長は地域の障がい者の雇用にも力を入れています。お店で働いている八名のスタッフのうち二名の方は、知的障がいを持った方です。二人は具材を串に刺す串打ちの作業を担当していますが、社長は二人が昼間一生懸命仕込みをやってくれるから、夕方からの営業にも、さらに心がこもるようになったんです、と言います。

「今後は仕事の内容や形態も工夫して、障がいを持った方の雇用ももっと増やしていけたらなあ…」  
そう語る社長。その言葉は力強く、優しさに満ち溢れていました。

### 採用と教育

代表 半田 真仁



広島県出身。高専会社に在職中、日本キャリア開発協会認定のキャリアカウンセラー試験に合格、精神保健福祉士の資格も得た。2年間、福島県の若者自立相談員、就職サポートセンター特別職業相談員を務め、その後「採用と教育」を設立。組織活性化アドバイザーとして、多くの医療・福祉施設の活性化に携わっている。

◆URL <http://www.saiyoutokyouiku.com/>